

府教委「入学者選抜における採点方法の改善について」に対する見解

2013年9月18日

大阪府立高等学校教職員組合

入試制度の複雑化、「複数受験」が招いた入試ミス

府教委事務局は8月30日、今春の入試ミスに関して「入学者選抜における採点方法の改善について」を教育委員会会議で報告しました。改善策として、①二系統による採点、②問題・解答用紙等の改善、③マニュアルの改訂とマニュアル遵守の徹底、④選抜日程の早期の公表、⑤年度内に答案用紙の最終点検を一律に実施、を挙げています。しかし府教委の改善案には、極めて複雑化した大阪府公立高校入試制度見直しの視点がありません。現在の入試制度は教職員に長時間過密勤務を強いており、多くの学校で休日勤務や違法な時間外勤務なしには入試業務が間に合わない実態になっています。事前の「選抜実施計画」などは勤務時間内に収まる建前で作成されていますが、現実の勤務実態はそうはなっていません。年々大きくなってきた建前と実態の乖離の矛盾が、「複数受験」化などの今春の入試制度改変をきっかけに「入試ミス」の形で一挙に表面化したと見るべきです。人的な条件を度外視して入試制度を複雑化させたいと、拙速な入試制度改変をおこなった府教委の姿勢を見直すことが改善の前提です。

府教委の改善案について

I 改善策①にある「二系統による採点」のための「答案用紙の写し」が複写（コピー）を意味するのであれば、二つの問題点があります。一つは精度の問題です。受検生ごとに「折り癖」がつき、濃淡が様々な答案を正確に複写しなければなりません。そのチェックも1科目数百枚の答案すべてについて行わなければなりません。それが現実に可能なのか、実際の答案を使つての検証がまず必要です。もう一点は複写作業に必要な労力・時間の問題です。「答案の複写」作業を教職員の業務にするならば、入試業務に携わる教職員の多忙化を一層助長します。すでに多くの学校では、「学力検査監督」の教職員の配置だけで手一杯となっています。このため学力検査の確実な実施のため、多くの学校では学力検査と並行しての複写作業は困難とされます。そうなればすべての学力検査が終了してから複写することになり、複写とチェックのための時間と、採点後と集計後に原本と複写を照合する時間が新たに必要になります。その間に挟まれる、採点・点検・集計等の時間が圧迫され、これまで以上の過密な作業が強いられ、かえってミスを生む危険性が高まります。「二系統による採点」を答案の複写以外の方

法でやるとしても、作業の簡素化・教職員負担軽減の観点が必要不可欠です。

改善策⑤の「年度内に答案の最終点検」にも大きな問題があります。これを教職員が行うとすれば、多くの学校では二回の入試と終業式の終了した3月最終週にしか実施できません。しかしこの時期は時間割編成・クラス編成などの次年度の準備や、入試業務で中断させられた部活動指導で多忙な時期です。教職員に最終点検を行わせれば、学校の教育活動が犠牲になります。そしてここでも教職員の時間外勤務を増大させることはまちがいありません。

このように、改善策①と⑤はいずれも、学校・教職員任せの安上がりの方では実施不可能です。

Ⅱ 改善策②「問題・解答用紙等の改善」と、改善策③「マニュアルの改訂とマニュアル遵守の徹底」については、具体的内容が不明なため評価できませんが、教職員の負担を増大させない改善が必要です。マニュアル改訂については、微細な部分までマニュアル化せず、各校の実情に合った柔軟性を保つ必要があると考えます。例えば「原因①」に言及されているボーダーゾーン付近の答案の再チェックは多くの学校で実施されていますが、再チェック答案の範囲の一律マニュアル化などは各校の実情にそぐわないものになります。

Ⅲ 改善策④「選抜日程の早期の公表」は当然です。大きく変更された平成25年度入試の日程の公表が選抜実施まで1年足らずと非常に遅かったうえ、細部の決定が細切れであったため、高校のみならず中学校にも混乱を引き起こしたことが不適切であり、拙速だったと言わざるを得ません。しかし、ただ単に公表を早めても、平成25年度入試と同様の日程であれば、二回の選抜日程が学年末の考査や成績処理、単位認定、進級判定などの日程と相前後することになり、在校生の教育活動に及ぼす悪影響は避けられません。

抜本的な簡素化、業務の効率化が必要不可欠

合否結果が変わる入試ミスは根絶しなければなりません。府教委が自らの責任を曖昧にしての小手先の「改善」では、新たなミスを誘発しかねません。教職員の過重負担に拍車を掛け、その結果、ミスの可能性を増やす「改善」では意味がありません。入試制度全体を総括し、高校と中学校両方の学校現場の声を充分反映して、教育上の真の必要性に基づく抜本的な改善を行うべきです。とりわけ「前期」「後期」二回の選抜が教育に大きな支障となっていることが重大です。「不合格経験」をさせられる中学生を大量に作り出し、高校生の1年間の学習の締めくくりを犠牲にする、この入試制度を早急に改めるべきです。後期入試への一本化や、合否判定のボーダーゾーン方式の廃止など、複雑化しすぎた入試制度・入試業務の簡素化・効率化を、府高教は求めます。